

すし業務米「恋初めし」収益増

高密度播種育苗移植と基肥一発肥料で

現場で使える！研究成果

長崎県では2021年に、多収で穂いもちに強く、縞葉枯病に抵抗性をもつ「恋初めし」を認定品種に採用し、すし用の業務用米として普及を図っている。業務用米は主食用米と比べて販売価格が安いことから、恋初めしが省力低コストで安定多収を得られる栽培方法について試験を行った。

その結果、播種量を1箱当たり乾籾250gと300gで高密度播種し育苗した苗は、通常の田植機で苗のかきとり量を最少にして移植しても欠株は少なく、標準播き（140g）と収量は変わららず、使用苗箱数を250g播きで2割、300g播きで4割少なくすることができた。また、株間は24cm以上の疎植より、18cmで移植する方が収量は多くなった。また、基肥一発肥料の

側条施肥体系で栽培したところ、基肥と2回の穂肥を施肥する分施肥体系との収量の差はなかった。

株間 (cm)	栽植密度 (株/m ²)	精玄米重 (kg/a)
18	18.5	61.6
24	13.9	57.0
30	11.1	57.2

以上のように恋初めしは高密度播種育苗移植栽培への適応性があり、株間18cmで移植し、基肥は標準施肥で栽培することで多収が得られることがわかった。さらに高密度播種育苗栽培技術と基肥一発肥料技術を組み合わせることで省力低コスト栽培が可能であり、低価格帯の業務用米への高い導入効果を得られる。

恋初めしを高密度播種育苗栽培技術と基肥一発肥料を用いて栽培し10a当たり収量が700kgとなった場合、ヒノヒカリの分施肥体系と比較して10a当たり約2万4千円の収益増となった。

（農林技術開発センター）